（二十）雪ちゃん、バイバイ

山羊の雪が来て5年がたった。今年も6月に2匹の仔山羊を産み落とし、向かいのオシャレなばあ様は毎日見にきては、ニヤケている。

「可愛いねぇ。何といっても可愛いねぇ。雄、雌、どっち？」

「やっと見分け方がわかったよ」と女房が笑う。

仔山羊を持ち上げて腹を見せ、

「これが臍の緒、そのすぐ下のボタンのようなでっぱりがオチンチンだから、今年は2匹とも雄だわ」

「あら、珍しいね。ずっと雄雌両方だったのに」

「そうねぇ、確率からいえば2匹とも雄ってのは4分の1だけど」

「この仔たち、オッパイ飲むの下手だよね。あたし毎日来てさ、あんたたちイッチョマエに立って歩いてるけど、オッパイ飲むのは下手だね、って笑ってやんの」

「このお母ちゃん山羊さ、元々右のお乳の出が少し悪いみたいなのよ。最初の年に1匹しか生まれなかった仔山羊が吸いつき悪くてさ、ずうっと左のお乳ばっかり吸ってたんだわ。今年はそのせいか右のお乳に乳がたまっちゃってるもんで、乳首自体もバカでかくなって仔山羊の口には大き過ぎるの。おまけに乳首の位置がエラク低いもんだから、なかなか仔山羊の口には届かない。おかげでこの仔らこっちを全然吸わないのよ。困ったもんだわ」

赤ん坊に乳をやったことのある女ならみんな経験があるだろうが、乳が張ると痛い。ほうっておくと乳腺炎までおきることがある。母山羊の雪の右の乳はパンパンに張って左の乳の倍ほどの大きさになっている。

お節介な女房、これは自分が助っ人にならねば、と意を決した。

女房は母山羊のはれ上がった右の乳を握る。山羊は痛がって逃げる。ならばと女房は山羊を檻（おり）に押しつけて逃げられないようにし、左手で乳を握りながら、右手で仔山羊の片足を引っ張ってきた。仔山羊の口に巨大な乳首を押しつけ、乳を搾（しぼ）る。仔山羊はつかまれているのから逃げようとするのに一生懸命で、飲むことにまで気

が回らない。乳はタラタラと地面に垂れ続ける。

女房はため息をつき、仔山羊を引っ張ってくるのは止めにした。傍に座りこんでいる仔山羊に向けて、乳を飛ばす。仔山羊はたまげてペロリと舐めた。

ホラ、お乳あるよ。おいで。

仔山羊はプルンと耳を振るばかり。

女房は諦めて小鍋に乳を搾り、山羊小屋の隅に置いた。仔山羊は知らん顔で、そのうち鍋の乳には草や泥が混じってしまった。この乳は犬にやった。犬は大喜び。

翌日。

女房はまた挑戦する。

檻の中で1匹の仔山羊が左の乳を吸い、もう1匹の仔山羊も乳が飲みたいのだが、右の乳も吸えることを知らず、ウロウロしている。

今だ、と女房は後ろから左腕で母山羊の尻を抱きかかえて動きを封じ、右手を伸ばして巨大な乳首を握った。仔山羊の目の前に乳が筋をひいて落ちる。仔山羊は口を開けた。乳首の先に吸いつく。女房はすかさず右手で乳を搾り続け、仔山羊はのどを鳴らして飲み続ける。

二、三度繰り返すと、乳首は中の乳がなくなって小さくなり、仔山羊の口の大きさにふさわしくなった。乳全体もしぼんで乳首の位置が高くなったから、吸いつきやすい。

どうやら仔山羊は右の乳も飲めることを覚えたようである。

やったね。

女房は腰を伸ばしてニンマリと笑った。

いつも2匹の仔山羊を見分けるのはなかなか難しいのだが、今年はどうも大きさが少し違うようである。

去年は生まれたての1匹が片足を引きずっていた。

3年前お産の一部始終を見届けた際、仔山羊をポトンと「産み落とす」瞬間を見ていたから、あれではどこか痛めても不思議はなかろう、と思ったものだが、その時の仔山羊は無事だった。去年と今年は、仔山羊の1匹が足を捻挫したようである。向かいのば

あ様も心配して、「お腹の中にいる時からじゃないよね、お産の時だよね。じきに治るよねぇ？」と眉をひそめて毎日見に来る。10 日ほどたって、どちらの仔山羊が足を傷めていたかわからなくなった時には、しみじみ喜んでいた。

仔山羊は誰が見ても可愛いから、見に来る人はたくさんいる。中でも小さい子を連れた母親やばあ様がよく来る。

近所に女房とほぼ同い歳で、子どもを 6 人産んだ強者（つわもの）がいる。上の子は早くも結婚して出産し、歩き始めたサー君を連れてきては近所を散歩したり、若きババに守りをさせたりする。夕方は婿（むこ）も合流してご飯を食べ、一緒に帰っていく。

「今日もサー君、ママと雪ちゃんのところ行って赤ちゃん見てきたんだよネ」とババが婿に言う。

「へぇ、おまえ、ママ友できてよかったなぁ」と婿の顔がほころぶ。

「え？ ママ友？」

「は？ 違うのか？ 雪ちゃんって『人』も最近赤ちゃん産んだんだろ。おまえ、育児の話とかもしてるんじゃないのか？」

婿とサー君以外の全員が一斉に爆笑した。

山羊がママ友かい！

「やだァ、雪ちゃんってのはヤギだよォ。人間じゃないよォ」

婿も顔を真っ赤にして笑いながら、雪ちゃん、って名前を言うからてっきり人間だと思うじゃないか、まさかヤギがこんな団地にいるなんて思わないよ、としきりに弁解した。

柴犬雑種のジョンは御年 9 歳になった。3 歳で来たころに比べると、散歩の時にあっちこっちへグイと引っ張る度合いも減った。

「こいつも白髪（しらが）がでてきたよね。歳だ」

週末に夫婦で犬の散歩に出て、リードを引っ張る犬 2 匹を後ろから見ながら亭主が言う。

「え、犬に白髪なんて出るの？ 犬には髪ないじゃん」

「髪はないけど全身に毛が生えてるから一緒だよ。ほら、首の後ろが白いだろ」

「アラ、そういえば前は全部薄茶で白いところなんかなかったっけ。あんたよく見てるねぇ」

亭主は元々理学部の生物系の出身である。生物学は観察から始まる。常に観察の結果仮説を導き、検証する。

純粋文系で元文学少女の女房は、この、今まで知らなかった「仮説」を検証するため、近所の高齢犬ウララちゃんの飼い主に聞いてみた。

「え、白髪？ うん、この子なんか顔が真っ白になったよね。もう 13 歳だもの」

これで科学的に「実証」されたかどうかはともかく、実例をもうひとつ知って、女房は納得した。

そうか、犬も毛の色素が抜けるのか。

じゃぁ、歳とってハゲル犬もいるのかな？

雌犬は雄犬に比べてハゲにくいのかな？

人間のこの亭主はハゲないが白髪がかなり増えた。女房は 40 代からめっきり髪のボリュームが減って、そのうち部分かつらかしらん、と鏡を眺める日々で、白髪だのハゲだのは他人事ではない。

ジョンとの距離がぐっと近くなったように感じるひと時である。

今時山羊を飼っているという家は珍しいので、人から人へとけっこう噂（うわさ）が広がるらしく、毎年のように「仔山羊が雌なら分けてくれないか」と知らない人から申し出がある。亭主はそれを聞いて「もの好きがいるもんだ」と笑うが、「現在飼ってる自分のもの好きは何なんだろう」と女房はクスクス笑っている。

今年も申し出があった。しかも、「雄でもいいから」「母ちゃん山羊が要らなくなったらそれでもいいから」というほどの筋金入りのもの好きである。隣町の新聞屋さんだった。

仔山羊をあげると連絡して来てもらい、実際に顔を見て話をしてみると、この男、筋金入りも筋金入り、亭主や女房とは比べものにならない、まさに究極のもの好きであっ

た。

「俺にとって山羊は家畜ではないなぁ、ペットだなぁ。仔山羊は可愛いからね、ピンクにしてみたいと俺思ったのよ」

女房の目は点になった。

女房と亭主は、山羊は家畜であってペットにはならない、という結論にすでに達している。

「で考えてね、食紅だと思ったのよ。奥さん食紅って知ってる？」

「ウチにあるよ。クリスマスケーキのクリームに使ったことある」

「そうそう。食紅なら人間が食べてもいいっつうくらいだから仔山羊にも安全っしょう。それでね、いろいろやってみてね、わかったの。まず、仔山羊の全身を濡らす。それでパッパッてあちこち食紅ふりかけてね、手で撫でると全部ピンクになるのよ」

女房、口があんぐりと開いてきた。

「仕上げにもう一度背骨に沿って食紅かけて、濃くすんの。いやぁ、可愛いよ」

動くぬいぐるみかい。

「そしたらね、道行く人が喜んで携帯で写真撮ってくんだわ。俺それ見てるのが楽しくってさ」

女房はたまらず笑いころげたが、ズボン吊りをつけ、黒縁の大きな眼鏡をかけた男は大マジメ。あきれ果てた女房はついでに言った。

「じゃ、もう１匹は黄色にしたら？ お菓子作り売り場に行けば食紅と並んで黄色も売ってるよ。沢庵（たくあん）に入れるやつ。ピンクと黄色、可愛いじゃん」

「いんやぁ、そこまでは俺も考えなかったなぁ」

そのピンクの山羊を、女房の隣のサラリーマンが見たことがあると言う。

隣のしっかり者の母親が話すには、「息子はすんごくビックリしてね、『真っ赤な山羊だ。ウソだ』って言ったの。そしたら一緒の車に乗ってた人がね、『ホラ、人間だって赤ん坊っていうくらいだから、仔山羊も生まれたては赤いんだ』って言うんだって。それもあんまり自信持って言うから、息子は『ひょっとしてそうなのかなぁと思った』ってわたしに言うのよ。でもわたし、お宅の山羊が生まれた時から見てるけど、真っ白よ

ねぇ」

あたりまえだ。

この日、もの好き男のとどめは山羊の移動方法だった。仔山羊をバイクに乗せて連れて行くと言うのである。女房はまさかと思ったが、男が乗ってきたバイクの荷台にくくりつけられた、野菜を出荷する時に使う頑丈なプラスチック格子の箱は、確かに生後ひと月の仔山羊が入らない大きさではなかった。しかし身動きできない窮屈さで、上から自転車のチューブで押さえつけられた仔山羊は嫌がって大声で鳴きわめく。それを聞いて母山羊まで、息子に一大事と大声で鳴く。仔山羊が去って 30 分ほどは、残されたもう 1 匹の仔山羊と母親の合唱が続いた。

もう 1 匹の仔山羊は、例年通り種つけ代に、女房がトラックに載せて連れて行った。これはもっと平和的な移動である。

この前の年、女房は医薬関連の技術翻訳の仕事を始めていた。

そうなると、毎日が忙しい。

翻訳は、注文に応じて製作・納品する他の仕事と同様に納期厳守である。約束した納期に遅れるということは、「もうこの先お仕事は要りません」というに等しい。最後は徹夜してでも納期に間に合わせなければならない。中年に徹夜はこたえる。それを防ぐには、計画を立ててその日その日のノルマを確実にこなしていくしかない。そして低品質の訳文を納品したら次の仕事がこなくなるのは目に見えているから、手も抜けない。日に最低 8 時間は働く必要がある。

女房は毎日山羊にかける手間と時間が惜しくなった。

そろそろ山羊飼いをおしまいにしようか？

5 年間、もう充分遊んだよね。

団地はあっちもこっちも開拓してきれいになったし、乳を搾ってチーズもヨーグルトもつくってみて、どっちも美味だった。

山羊の雪にとっても、普通なら山羊小屋から 1 歩も出られないまま配合飼料で一生を

過ごすのに比べれば、太陽を浴びて自然の草やつる草、木の葉が思う存分食べられて、いい人生ならぬ「山羊生」だったのじゃないかしらん？

「そんなこと、他の『山羊生』を知らない雪にわかるわけがないじゃないか」と亭主は笑う。

いっぽう、ちょうどそのころ、山羊の世話が大変なことから、女房と亭主との間には山羊を飼い始めた責任のなすり合いが始まっていた。

「あんたが飼おう、って言って探してきたんだよ」とビールを片手に亭主が口を尖らせると、

「あんたが、仔山羊は可愛いだろうねぇ、飼ってみたいねぇ、って言ったんじゃない」と女房も応戦する。

「まさか、あんたがホントに山羊を見つけてくるとは夢にも思わなかったんだよ」と、しみじみ亭主が語る言葉に女房が思い当たるのは、イタリア暮らしの間、「あなたみたいな人は見たことがない」と散々外国人からも日本人からも女房は言われ、その理由が「並々ならぬ実行力」だったことである。

そうか、フツーの人はたとえ山羊を飼おうかと思っても、思うだけで実行しないのか。だけどわたしはアッサリ実行しちゃったワケね。

さらに、この 5 年の間に女房が亭主を「観察」していてわかったのは、亭主はテレビでペンギンがペタペタ歩くのを見れば「可愛いねェ。一緒に散歩したいねェ。アア飼ってみたい」と叫び、ライオンの赤ん坊を見れば、「可愛いねェ。抱っこしたい！ 飼ってみたいねェ」とニンマリ目尻を下げて言うことであった。

あくまで「飼ってみたい」であって「ホントに飼いたい」ではなかったのである。

それに乗った女房がバカだった。

つくづく女房は反省している。

女房には姉がいる。大学で知り合った専業農家の長男と結婚してみかん農家に嫁（とつ）いだ。その家は昔、みかんだけでは長男の学資が出ない、と豚を飼い始め、一時は

20匹ほどの母豚と3匹の種豚、そしてそこで産ませた200匹以上の仔豚を飼っていた。

「あんたねぇ、生き物を飼うってのはタイヘンなことだよ。空地の草なんて、山羊に食べさせるより草刈り機で刈る方がよっぽど楽だよ」

姉のその言葉が身にしみる。

しかし、山羊飼いを終わりにするといっても、雪をどうするのか？

今まで飼っていた猫は、死ぬたびに庭に埋めて家族一同手を合わせて拝んでいたが、山羊を埋めるにはバカでかい穴を掘らねばならず、だいたい雪はまだ死んでいない。女房に山羊肉を食べてみたいという好奇心がまったくないわけではないが、この生きている雪を殺すような可哀そうなことは、断じて、できない。

誰か代わりに飼ってくれる人がいればいいのだが。

でも、そんな奇特な人、いるかなぁ？

そうだ、あの、ものすごく変わり者の新聞販売店主は、「母ちゃん山羊でも引き取るよ」と言っていたではないか。

彼に貰ってもらおう！

新聞屋さんは電話ひとつで快諾し、軽自動車でやってきた。その軽自動車に山羊を乗せて帰るという。

どうやって？ と目を剥（む）く女房に、新聞屋さんは平然と軽自動車の中を指さし、ホラ、後ろのシートをはずしてあるっしょう、手製の檻（おり）が見えるっしょう、と説明する。「これは牧場と家との山羊移動用専門に使ってんのよ」。

確かに前部座席のすぐ後ろにはベニヤ板製の柱らしきものが何本か見える。女房が山羊の綱を引いて軽自動車の後ろの扉を開けて入り、反対側の扉から出て綱を引くと、山羊はおとなしく軽自動車に乗った。すかさずふたりで両方の扉を閉める。山羊が軽自動車に乗っているとは信じがたい光景だが、事実だった。

が、それからが大事（おおごと）だった。廃車寸前のポンコツ車は、バッテリーがあがってエンジンがかからない。新聞屋さんは承知していて準備よく発動機を助手席に積んでいた。

発動機、ねぇ。

「奥さん、大丈夫。俺、できるから」

しかし、紐を引いても引いても発動機は動き始めない。30分後、女房がウチの車とバッテリーケーブルで接続しようか、と提案すると、新聞屋さんはすなおにうなずいた。バッテリーは動き始め、山羊は軽自動車の後部におとなしく収まって去っていった。

女房は感心して首を振り振り見送った。

この少し後、亭主は通りすがりに新聞販売店の横で赤と青の2匹の仔山羊を見て、車の中でひとり笑った。女房は赤と黄色を勧めたが、新聞屋さんは黄色ではなく青を選んだのだ。たぶん何人もが携帯で写真を撮っていったことだろう。

そして半年後――

夫婦はとんでもないニュースを聞いた。

あの新聞販売店の建物が火事で全焼したというのである。人の被害はなかったらしいが、山羊の被害があったかなかったかまでは聞こえてこない。

雪の運命は不明のままであった。

が、確かあの新聞屋さんは、「牧場」が別のところにあるような話をしていたはずだ。

「雪ちゃん生きてるかねぇ？」

「生きてるといいねぇ」

「いっぺん会いに行ってみたいねぇ。ウチらのこと覚えてるかねぇ？」

「どうだろう。でもせんべい持ってったら、前足を踏み踏みするんじゃないか？ そうしたら覚えてたってことだよ」

さらに2年後、同居に来ていた女房の父親は、やっぱり故郷がいいと山口県へ帰っていった。この父親は男やもめになったとたんに顎（あご）ひげをはやし始め、周囲の家族や友人は誰も褒めなかったが本人はご満悦で、しばらくすると立派な山羊ひげとなった。女房はこの山羊ひげを生やした父親と、本物の山羊ひげを生やした山羊とを並べて写真を撮りたいものだとずっと思っていたが、言いだせないままに父親は去ってしまっ

た。

つくづく残念である。

次女も進学して家を出、かつては 7 人、あるいは 5 人と 6 匹いた大家族も、3 人と 3 匹に減って静かになった。

代わりに、ひとり暮らしが不自由になってきた亭主の母親が同居に来た。亭主が定年退職したら、亭主と女房は亭主の実家を継ぐために山口県へと引っ越す予定である。実家には田畑と多少の山林がある。亭主の父親が亡くなって母親が体調を崩して以来、畑は耕作放棄地となって草を刈るものはおらず、亭主は帰省するたびに大汗をかいて草刈りに追われている。

「山口でもそのうち山羊を飼うかねぇ？」

「世話がタイヘンだよ」

「でも、まちがいなくよく草を食べてくれるよ」

近くの親戚に話すと、「そりゃいい。ウチにも貸してくれ」と大歓迎である。

実際に飼うかどうかは、さぁ、その時のお楽しみ……。